

ガラス作家

大迫友紀さん

聞き手 外川智恵さん ● 大正大学表現学部准教授



おおさこ・ゆき

東京都出身、武蔵野美術大学卒。大学で陶芸を専攻した後、富山ガラス造形研究所および金沢卯辰山工芸工房でガラス工芸を学ぶ。第46回日本クラフト展海外研修受賞。器にはファンも多く、雑誌でたびたび取り上げられるほどの人気である。国内外で個展を開催。

**加賀藩の昔から工芸の盛んな金沢で
自分の工房を開設**

外川 本日は、金沢の工房を拠点に、優しい表情をもつガラス作品を作り続けていらっしゃる大迫友紀さんにお話をうかがいます。

大迫さん、この工房は素敵な空間ですね。
大迫 ありがとうございます。2017年9月から、ここで制作しています。

金沢は、加賀藩の昔から工芸の盛んなところとして有名です。金沢市は伝統工芸の継承・発展や文化の振興を目的として、工芸家の育成を図るために金沢卯辰山工芸工房を1989年に設立しました。その関連施設である牧山ガラス工房というレンタル工房で、私はガラスを吹いたり削ったりという全ての作業を行っていました。

しかし、利用できる時間がどうしても限られるため、仕事量が増えてくると、そこだけでは追いつかなくなっていました。

そのため、自分の作業場を持つと思うって、この工房を開設しました。

外川 快適な空間を見つuckerのは大変でしたか。

大迫 この部屋の隣の作業スペースは床にコンクリートが打ってあって、以前は駐車場でした。ガラス作品の制作は水仕事が多く、重量のある機械類を置いたりするので、下がコンクリートだと安心なのですが、このように同じ家の中にあるという物件はなかなか見つかりませんでした。金沢市では工房を持つ人に助成金を支給する制度があるので、それを活用して借りました。

外川 制作環境を整えるために支援を受けることができるんですね。道具や機械をきちんと置けるとか作業時間を気にしなくてもいいといったことは、作品づくりに影響するものですか。

大迫 ええ、大きく影響します。作品の制作には、ガラスを吹いたり、削ったり、窯で焼くといった工程が必要ですが、その中

の削る作業を、以前はレンタル工房を週に1〜2日借りて長時間続けて行っていて、体に負担がかかるようになったのです。

現在は、レンタル工房で作業したものを持ち帰り、別の日に自分の工房で作業を続けることができるので、とても楽になりました。

北陸の雪景色の美しさに感化され 作風も冬っぽく変化

外川 自分の工房を持ったことで作風が変わるなど、作品に影響はありましたか。

大迫 まだそこまでは意識していませんが、私は制作するときに周りの影響を強く受けるタイプです。ガラス制作を始めて2〜3年たった頃から、冬景色や雪をモチーフにした作品を手掛けるようになりました。

私は東京出身で冬が苦手でしたが、ガラス制作を学ぶために富山に引っ越したところ、一晩で積もる雪の多さに驚きました。その雪景色の美しさに非常に感化されて、

冬っぽい作風になったと思います。

外川 環境に影響を受けた作品が生まれたのですね。

大迫 ええ。ですから、この工房の影響も、これから次第に現れてくるのではないかと期待しています。

外川 おもしろいですね。アーティストは自分の内なるものから作品を生み出すのかと思っていましたが、外からの影響も大きいのでしょうか。

大迫 私は、外からの影響のほうが大きいような気がします。

外川 大迫さんは、なぜ北陸の地をお選びになったのですか。

大迫 金沢は伝統工芸で有名ですが、江戸時代には「御細工所」が加賀藩の高度な工芸品生産の中心となっていました。その伝統を受け継ぐ金沢卯辰山工芸工房が金沢市が母体となって運営されており、大学などで基礎を修得した人たちが、より高度な制作や研究を行っています。期間は2〜3年



で、その間は金沢市から助成金が支給されるため、制作に専念できます。

私は武蔵野美術大学を卒業し、金沢の前に、まず富山ガラス造形研究所で学びました。ここも市が運営しており、ガラス制作の基礎的な知識や作業を習得することができ、学費は非常に低く抑えられています。このように北陸は工芸に対して理解があり、それを支える土壌があるように感じます。こうした環境があることを知って、北陸にやってきました。

外川 冬が苦手なのに北陸に移り住んで、それが作品にも影響して……。大迫さんの

作品は、ご自分の人生の歩みを表しているようですね。

大迫 そういえると思います。

ガラスは、仕上がりに近い状態まで自分の手で作業できるから面白い

大迫 私は大学に入る前から、工芸など、自分の手でものを作るようなことを学びたいと思っていました。中でもガラスに興味がありましたが、当時は武蔵野美術大学にガラス科がなかったため、ガラスに近い印象を受けた陶芸を専攻しました。

手で触れる素材がいいと思って陶芸を選びましたが、窯に入れて焼くと、自分の想像していた仕上がりと実際に焼きあがった仕上がりとの間に大きなズレがありました。

外川 窯任せのところがあるのですね。

大迫 そうなのです。どんなに手で作業をしても、最後の部分は窯任せになってしまふことと、焼くと10%くらい縮みます。思っていたよりもだいたい小さくなって窯か

ら出てくるので、そのギャップを自分の中でうまく埋めることができました。本当は、そこが陶芸の一番おもしろいところだと思いますが、私はそれを受け入れられなかったのです。

外川 ガラスは違うのでしょうか。

大迫 私は、主に吹きガラスで生地を作ります。熱すぎて手で直接触ることはできないので、大きなピンセットのような金属の道具を使って、自分の好きな形やサイズにできます。また、加工の作業では、吹き上がったものを自分の手で仕上がりに近い状態まで作業できるのが面白いと思います。

外川 自分の世界があって、その全てを自分の手でお作りになりたいのですね。

大迫 ええ。職人の方に生地を吹いてもらって、それを削って制作する人もいますが、私はそれは性に合わないので、自分で吹いています。

外川 全て自分でやりたいというのは、小さい頃からそうでしたか。

大迫 美術が好きな叔母に都内の美術館などによく連れて行ってもらい、中学生の頃からは一人で展覧会に行っていました。作るよりも見るほうが好きでしたね。

外川 「私もやってみよう」と一歩踏み出したきっかけは、何でしょうか。

大迫 中学生の頃から、将来は美大に行きたいと思っていましたが、自分は創作者のタイプだと思っていなかったので、芸術学のような分野を専攻しようと考えました。

ところが、大学受験の予備校に通い始めたところ、芸術学志望でも課題にデッサンがあったのです。その練習をしているうちに楽しくなりましたが、私は画家や彫刻家などよりも職人的なほうが向いている気がして、工芸を志望しました。

何かがピタッとくる瞬間の 喜びや心地よさ

外川 大迫さんは武蔵野美術大学で陶芸を専攻なさいました。周りには、素敵な個性

をお持ちの方が多かったのでは。

大迫 とても絵がうまいなど、芸術的な才能豊かな人がたくさんいましたね。

外川 アーティストの方々にインタビュースると、「みんなすごいけれど、私は私の道を行く」という人や、「気がついたら、いつの間にかこの道に進んでいた」という大きく二つのタイプがあるように思います。大迫さんはいかがでしたか。

大迫 「気がついたら」のほうだと思っています。また、材料であるガラスが性に合っていたのでしょね。

テーマを重視したり、材料にはこだわらない方もいらっしやいますが、私はそうではありません。材料に触れて、そこに新たに何かを付け加えたり、逆に、今までやっていた工程をやめてみる。そういう足し算や引き算を繰り返していると、何かがピタッとくる瞬間があります。「あ、これだ」という感じを見つけたときの喜びや心地よさが、私がガラス制作を続けている理由の一つで

はないかと思っています。

外川 最近の作品で、その「ピタッときた」というものはありますか。

大迫 これまで、ガラスのカットの美しさを見せるために色は使っていなかったのですが、小さい器だったら色が入っている料理や飲み物のじゃまにはならないのではないかと思い、作ってみました。吹きガラスの生地を加工し、器の上のほうだけを火であぶり直すと、独特のツヤ感と色のグラデーションが生まれたのです。

外川 とても素敵ですね。持ってみると、どこか優しい感じもします。



外川 智恵さん

大迫 このような器を制作する際は、少し高く作ってから上を切り落としてそろえます。透明なガラスであれば、切り落とした部分や失敗作を窯で溶かし直して再利用できますが、色が入っているガラスを透明なものと一緒に溶かすと混ざってしまうので、捨てるしかありませんでした。

そこで、色が入っているものだけを溶かし合わせ、吹いている途中のガラスの生地にかけてみたところ、色の入りかたが複雑になり、かつ色の具合が一つ一つ異なっていて、一点もののような感じに仕上がったのです。単に色を着けたのではなく、色ガラスを再利用して、新しい色の表現方法を見つけたと思います。

ガラスの表面を「火で磨く」と人間には作れないような表情が生まれる

外川 ガラスの色も器を持った感じも、本当にしっくりきます。色が入ってもじやまにならないことに気付いたのがきっかけだ



とおっしゃいましたね。

大迫 ええ。ただし、すぐに思いついたわけではありません。色の着いた皿をかなり前に作ったことがありましたが、色の印象が強すぎて日用使いには向きませんでした。色の表情としては面白いと感じたので、いつか使ってみようと考えていたのです。

外川 それが、今回生かされたのですね。

意図的なものと偶然生まれる色の表情とが折り重なっている感じがします。

大迫 ありがとうございます。私は、吹き

ガラスの表面を全部削ってしまうと自然に生まれたガラスの表情が消えてしまうので、あまり面白くないと思っています。どこか自分がコントロールしきれない部分を加えたほうが、新しい発見があります。吹きガラスで吹いて成形し、いったん削り終わつたものを窯の中で温めておき、もう一度炎に当てて表面を溶かすと、色のグラデーションが生まれる。表面を「火で磨く」と、人の手で磨いても作れないような表情が生まれて、それがとても気に入っています。

外川 陶芸は窯の火で縮むから自分に合っていないと感じたのに対して、ガラスは炎によって生まれた表情を楽しむ。人間って、面白いですね。

新しいものを生み出したいという 気持ち치가ガラス制作の唯一の原動力

外川 最初にガラスに興味をお持ちになったのは、いつ頃でしたか。

大迫 予備校の先生から陶芸や染色や金工

といった選択肢のリストを見せていただいた中にガラスがあったのですが、ガラスを手で作ることが想像できませんでした。江戸切子や、ガラスを吹いたり削ったりという世界を知らず、ガラスといえば工業製品しかないと思っていたのです。そのため、どうやって制作するか見当がつかなかったので、逆に興味をおぼえました。

外川 大学では課題提出の締め切りや卒業制作があります。ある程度の枠の中で芸術作品を作らなければならない厳しさをお感じになったことはありませんか。

大迫 たいへんでしたね。新しいことを学び、それが次第に楽しくなってきたところで課題を作るものの、さらにステップアップするのではなく、次のテーマに取り組みなければならぬ。作ったものの行き場所がないというか、置いてきぼりのまま、どんどん先へ進まなければならないように感じていました。新しいことに挑戦する面白さはあったのですが、「作る」ということに

関しては、納得しきれないままに移っていくという思いがありました。

外川 当時の納得しきれない思いは、現在の創作活動に生かされているでしょうか。

大迫 それが自分の中で解消されたのは、金沢卯辰山工芸工房に来てからです。そこでは基本的に課題を与えられることなく、半年ごとに先生方の講評はあるものの、自分で3年間の計画を立てて取り組みます。とても自由なところだったので、一つのことを結果が出るまで続けてから違う方法を試すといったことを最初の1年間にじつくりとできました。そこで初めて、自分の中で「ようやく完成した」と思えるものが得られました。また、ものづくり自体を、とても楽しく感じるようになりました。

外川 お話をうかがっていると、自分が納得しないと前に進めないとかがおありになるように感じました。

大迫 それはあると思います。火であぶったり磨りガラスのようなグラデーションを

つける技法は10年くらい続けているので、ある程度コントロールできるようにになりました。今は、自分にしかできない深みのあるものを作りたいと思っています。

外川 大迫さんが作品を作り続けていらっしゃる原動力は何でしょうか。

大迫 何か強い思いがあるわけではなく、私にとっては食事をしたり眠ったりといった日常生活の中の一つのようなものです。

外川 生きるという行為の一部なのですね。

大迫 はい。ただ、何か見たことのないものを見てみたいという気持ちはとても強いので、それが唯一の原動力かもしれません。

外川 私は批評を書くことがあるのですが、制作者の大変さに比べて、私自身の行為にある種の無責任さや気楽さのようなものを感じることがあります。それが嫌で、もっと「自分」に責任を持ちたいと思っていたのです。「生活するように、制作する」というお話は大きなヒントになりました。自分の「好きなことをする」ということを、自

分に許す。これは生きる喜びにつながるのではないかと思います。

何かを足すのではなく、

引いたほうが美しくなることもある

外川 私も芸術や美術品が大好きで絵を描くこともあります。芸術家のオーセンティックなあり方ってすごいと思うんです。私は「これは私が作った」と堂々と言えず、どこかに恥ずかしさがあるのに、芸術家は素直に作って発表していらつしやる。何てマチュア（成熟した）な生き方をしているんだらうと、うらやましくなります。

大迫 作ったものには当時の自分がかかなり現れていると思うので、私も恥ずかしさは感じます。自分がかつて作ったものを目にする、パッと本を閉じるように見なかったことにできないかと思うほどです。

また、新しいものを作ろうとすると、何かを足していこうとして余計な作業が盛り込まれる場合が多いですね。そのときは



気持ちが高揚して楽しくても、あとで見返すと「あー、残念」ということになります。

外川 今のお話にはとても共感しました。足そうとするのではなく、実は引いたほうが美しくなる場合もありますよね。あれは不思議です。なぜでしょうか。

大迫 プラスしたら何か新しいものを見せてくれるのではないかという「期待感」のような気がします。

外川 自分の内面を表した作品を世に出し続けていらつしやるというあり方を心から

尊敬いたします。

大迫 私の場合は、作っているものが器だという点で、少しは隠れているのではないかと思います。特に、「アート」よりも「実用」のほうに寄ったものを作っているので、そこに自分の思惑が強くなりすぎると、器に盛ったお料理が浮いてしまつてしっくりこない場合もあるでしょう。どこかで少し引くというか、作品にあまり自分を強く出さないという意識はあります。

日常の中で、できるだけ意識せずに使つてほしい。「今日はこれを使うぞ」ではなく、無意識のうちに選択しているような器が作れたら理想だと思っています。

**興味を持ったなら考えてばかりいないで
とりあえずやってみることが大事**

外川 大学時代も含めて、芸術家志望の人は周囲にたくさんいらつしやったと思いますが、その中で大迫さんがここまで続けてこれた一番のポイントは何でしょうか。

大迫 ほかのことと両立ができず、これで何とかするしかなかったということが、多分大きかったと思います。

外川 ガラスでいくしかないという覚悟を決めた、ということでしょうか。

大迫 ずっとガラスの制作を続けてきて、気が付いたらこれだけになってしまったという感じです。

また、運がよかったと思います。金沢の研修所を終えたあとは、全国各地のクラフトフェアに参加して、自分で TENT を広げて販売したり、借りていたレンタル工房で、運営スタッフの仕事もしたりするうちに、作品の注文も少しずつ増えてきて…。

さらに、ここ2〜3年で状況が変わりました。海外のお店、特に中国で、日本の作家の展覧会を開いたり作品を取り扱うところが非常に増えています。私も、台湾や中国の杭州などで合同展や個展を開いていたとき、今年は上海で個展の予定があります。

外川 武蔵野美術大学で学ぶ後輩の方々に、

何かアドバイスをいただけますでしょうか。

大迫 自分の大学時代を振り返ってみると、あまりいろいろなことにチャレンジするタイプではなく、工房にこもって作業していることが多かったように思います。やはり、興味を持ったことは、いろいろ考える前にとりあえずやってみることが一番大事なのではないかと思っています。

外川 目の前に来たものは試してみる、ということですね。

大迫 誰でも最初の一步にちゅうちょして、



大迫友紀さん(右)と外川智恵さん
(2019年1月17日 工房にて)

考えている時間が長かったりします。しかし、始めてみればいろいろなアイデアやヒントが出てきたり、新しい情報が手に入ることも多い。特に学生であればまだ若いので、やってみて失敗したり、やはり違うなと思ったらやり直せばいいだけの話です。

以前、個展を手伝ってもらった学生から、大学卒業後に陶芸の学校に行こうか迷っていると相談されたことがあります。しかし、よく聞いてみたら、興味のある学校に見学にも行っていないで。

今はネットで検索すれば情報が簡単に手に入るし、選択肢も広いのですが、まず行ってみるとか、一つでもいいから具体的な行動を起こせば、自分で判断できるようになるのではないかと思います。私も、大学の専攻は陶芸でしたが、こうしてガラス作家になったわけですし。

外川 大迫さんは、おっしゃることと行動が一貫していると思いますね。

本日は、ありがとうございます。